

## 第49回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会報告

第49回言語教授法・カリキュラム開発研究会は、2020年3月に拡大した新型コロナ感染症(COVID-19)の影響下、対面での全体研究会の実施には困難が伴ったため、初めてZoomを活用して「コロナ禍における外国語教育－日本語の場合ー」というテーマで2020年12月19日(土)午前10時30分から開催された。日本国内各地から、また、海外からの参加者11名を含めて67名の参加者があった。

◆ 開催日時	2020年12月19日 (土) 10時30分～12時30分 ※日本時間	
◆ 開催場所	Zoomによる研究会	
◆ 次 第		
10：30～	開会の挨拶	国際言語文化センター所長 教授 藤原三枝子 (司会：国際言語文化センター教授 中村 典子)
10：35～11：35	＜基調講演＞	「コロナ禍におけるロードアイランド大学日本語科の取り組み」 米国 ロードアイランド大学教員 福永達士
11：40～11：50	質疑応答	
11：50～12：00	休憩	
12：00～12：15	「甲南大学の日本語教育について」	国際言語文化センター准教授 谷守 正寛
12：15～12：25		福永先生と谷守先生を中心とするディスカッション
12：25～12：30	まとめ	国際言語文化センター准教授 吉田 桂子

### 《基調講演》

#### 「コロナ禍における ロードアイランド大学日本語科の取り組み」

米国 ロードアイランド大学 福永 達士

#### 講師紹介

福永達士 (Ph.D.) Assistant Professor of Japanese, University of Rhode Island

プロフィール：神田外語大学英米語学科卒業（日本語教員養成プログラム修了）。モナシュ大学大学院修士課程修了（応用日本語学）。パデュー大学大学院博士課程修了（応用言語学）。

2005年、ベトナム・ホーチミン市の日本語学校で日本語教師のキャリアを開始。その後、神田外語大学日本語教員養成プログラム室助手、国際交流基金日本語専門家（タイ）など、計5か国で日本語教育と日本語教員養成に携わる。2019年8月より現職。

#### 〈講演者による要旨〉

#### コロナ禍におけるロードアイランド大学日本語学科の取り組み

##### 1. はじめに

新型コロナウィルスによって引き起こされたパンデミックの影響により、ロードアイランド大学（University of Rhode Island）（以下、URI）の日本語学科の全授業は、2020年春学期の途中で急遽、オンラインで実施されることになった。本発表の目的は、効果的なオンライン授業の提案といったものではない。あくまでも、外国語としての日本語教育（Teaching Japanese as a foreign language）という文脈において、米国の一大学の日本語プログラムが、オンライン化に伴ってどのような困難に直面したか、その課題と対策、および授業実践を共有することである。

##### 2. 2020年春学期で直面したオンライン授業の課題

春学期半ばにある一週間の春休みに、大学から「再来週から対面授業の中止」という指示があった。実質、準備期間として与えられたわずか約十日間で、それまでオンライン授業の実践経験がない筆者と同僚の日本語教員で、春学期開講の日本語4コースと日本文化1コースのカリキュラムをすべて再構築し、付け焼刃的まま授業実践をすることになった。オンライン化のための主な変更点と、その実践に伴って直面した課題は下記の通りである。

変更点1：教室からビデオ会議システムを使用した授業活動への完全移行

→課題1：ビデオ会議システムを使用して、どのように効果的な授業活動が行なえるか

変更点2：大人数クラスで同期型授業と非同期型授業を導入

→課題2：非同期型授業やオンラインタスクにどのように取り組ませるか

→課題3：LMS（Learning Management System）をどのように効果的に使用するか

変更点3：教室外のインタラクションもオンラインに移行

→課題4：オンラインコースで、学生一人一人とのラポール形成をどのように行なうか

→課題5：効果的なオンライン課外活動をどのように実施するか

変更点4：教室内の発表活動をYouTubeへの動画投稿に移行

→課題6：日本語の発表動画は何のために、誰のために作成するのか

変更点5：紙媒体の評価ツールをオンライン化

→課題7：手書きで取り組む課題の意義は何か—手書きとタイピングのどちらを重視？

→課題8：外国語として日本語を学ぶ学習者にとって必要な漢字能力とは何か

- 課題9：教科書とワークブックは、URIの日本語コースの目標に合致しているか
- 課題10：筆記試験の意義は何か —筆記試験と口頭試験のどちらを重視？—

### 3. 2020年夏学期と秋学期での取り組みと課題への対策

オンライン授業への変更から約一か月半後、上述の課題を残しつつ、4月末に春学期が何とか終了した。その後、約2週間後に開始する夏学期の準備に取り掛かった。2020年夏学期は、「中級日本語Ⅰ／Ⅱ」がそれぞれ5週間、あわせて10週間連続でオンラインで実施されることになっていた（具体的なコースデザインとスケジュールなどは、Fukunaga (2020) を参照）。下記に、春学期に確認された10の課題にどのような解決方策を講じたのか、筆者が担当した2020年夏学期の「中級日本語Ⅰ／Ⅱ」、そして続く2020年秋学期の「中上級日本語Ⅰ」での実践を中心に下記に述べる。

#### 対策1：オンライン研修の参加とアメリカ国内外の日本語教員との連携

オンライン化決定直後から、URIの「オンライン教授法コース」や国内外の学会が実施したウェビナーや発表にオンライン参加した。しかし、一番の学びは、知り合いの日本語教員に筆者の授業に参加してもらい、フィードバックを得て改善する活動だった。【→課題1と3への対応】

#### 対策2：4年間のカリキュラムの見直しと使用教科書変更

URI現代・古典言語文学学部では、パンデミック前からURI Proficiency Initiativeというプロジェクト (Spino & de Bruin, 2020) のもと、ACTFL言語運用能力ガイドライン (2012) を参照にしながら、プロフィシエンシー重視のカリキュラム改革が進められていた。そのため、当初は対面授業でのコースを想定していたものの、今回の事態を受けて、オンラインコースを対象にしたカリキュラムの抜本的見直しを行なった。まずは、URIの日本語学科が4年間の日本語プログラムで目指す目標を明確化し、その後、その目標を達成すべく、評価活動のリデザイン（後述）と教科書の再選定を行なった。十分に内容を検討した上で、「中級日本語Ⅰ／Ⅱ」、および「中上級日本語Ⅰ」で使用していた『初級日本語げんき』を、『いろどり生活の日本語』<sup>1</sup>（以下、『いろどり』）に変更した。採用理由は、(1) 中～上級コースの学生は、日本での留学や就労を強く希望し、言語知識のみならず、実践的な日本語運用能力の向上を望んでいること、(2) 『いろどり』がコミュニケーションタスクを多く採用していること、また(3) 言語的要素のみならず、文化的要素の多い内容（例、日本の生活TIPS）を含んでいること、そして、(4) 『いろどり』の教科書も音声データも全て無料であることが挙げられる。【→課題9への対応】

---

1 <https://www.irodori.jpf.go.jp/>

### 対策3：同期型授業の見直し—語彙や文法を教えるための授業をしない—

「中級日本語Ⅰ／Ⅱ」、及び「中上級日本語Ⅰ」では、授業内で語彙や文法説明をすることはやめ、コミュニケーションタイプなタスクへの取り組みを主な活動にした。学生は、『いろいろ』と付属の音声データを用いて語彙と漢字を自習し、授業前に「オンラインレッスンクイズ（後述）」を受ける。授業では、Can-doで学習目標を確認し、リスニングやスピーキングのタスクに取り組む。授業最後にCan-doが再提示され、学生各自が自己評価活動を行なう。授業後は、学生がLMSの「文法クイズ」で自習し、適宜、教科書の「文法ノート」を参照した。2020年春学期まで、「中／中上級日本語」は言語形式を中心とした教授法アプローチであったが、夏学期以降はコミュニケーションタイプなタスクの取り組みが中心となり、言語形式に焦点を置いた活動は、その課のまとめの作業として行なうようになった。【→課題2と3への解決方策】

### 対策4：評価活動のリデザイン

評価活動をデザインするにあたっては、外国語学習ナショナル・スタンダーズプロジェクト（NSCB, 2015）（以下、スタンダーズ）の枠組みを参考した<sup>2</sup>。スタンダーズは、学習者が外国語を学ぶ際、目標言語の何が理解できるようになり、目標言語を使ってどのような言語行動をとることができるかについて、それぞれの目標領域の頭文字をとって5つのC（Communication、Cultures、Connections、Comparisons、Communities）を考慮するよう提案している。さらに、目標言語でのコミュニケーションがどのような状況で、どのような目的を持って行われるのか、(1) インターパーソナル(interpersonal)、(2) 解釈(interpretive)、(3) 発表(presentational) の3つの「コミュニケーション形態」を認識する必要があるとしている。インターパーソナル形態は、会話などの口頭、またはメールなどの文書で直接、相手とコミュニケーションをとることである。ポイントとなる点は、対話相手との積極的な意味交渉(negotiation of meaning)があることである。一方で、解釈形態とは、直接やり取りする相手がない状況で、文書を読んだり、映画を見たり、スピーチを聞いたりして、その書き手や話し手の意味を理解することである。この時に大切なことは、適切な文化的解釈が受け手に求められることである。スタンダーズでは、外国語教育において、目標言語を理解するには、言語的要素のみならず、目標文化の深い理解も必要不可欠だとしている。解釈形態と同様に、発表形態も直接やり取りをする相手がない。例として、口頭であればスピーチ発表、文書であればレポートや記事を書くことが挙げられている。しかし、このような一方通行のコミュニケーションでも、話し手や書き手の意図や真意が、情報を受容する側に正しく伝わるために、言語知識のみならず文化的知識が必要だとしている。今回の評価タスク作成においては、それら3つのコミュニケーション形態を意識した取り組みを行なった。下記の表1は、各評価タスクと、主なコミュニケーション形態と、対応する4技能をまとめたものである。

2 日本語訳は聖田（1999）を参考した。

表1 評価タスク

評価タスク	コミュニケーション形態	4技能
授業内で実施されるタスク	インターパーソナル	リスニング、スピーキング
ワークシート	解釈、発表	リーディング、 <u>ライティング</u>
レッスンクイズ	解釈	リーディング、タイピング
サマリークイズ	解釈	リーディング、タイピング
口頭試験	インターパーソナル	リーディング、スピーキング
プロジェクトワーク	発表	タイピング、スピーキング
ウェブページ(学習eポートフォリオ)	発表	タイピング

授業内の主な活動は、コミュニケーション型なタスクである。伝統的な知識伝達型/講義型の授業とは違い、タスクへの積極的な参加が評価の対象となる。授業後、学生はLMSにあるワークシートに取り組む。なお、『いろどり』のタスク設定は日本となっているが、ワークシートのタスク設定には、ロードアイランド州を含む、米国東海岸地域も追加した。タスクの場面や内容については、ACTFL言語運用能力ガイドライン（2012）、そして『みんなのCan-Doサイト』<sup>3</sup>を参照して、大学での教師との会話や、ソーシャルイベントでの日本人コミュニケーションとの交流といったフォーマルな場面、そして、「しゃべりば（日本語会話クラブ）」や学内でのほかの学生や日本人留学生とのインフォーマルな会話という場面のタスクを作成した。また、学生たちが在学中に遭遇するであろうと思われる場面のみならず、近い将来、日本での留学やインターンシップの際に想定される場面なども盛り込んだ。2020年春学期までは、日本語で手書きできることを重視していたが、2020年夏学期からは、日本語をタイピングできることに重点を置いていた。そのため、ワークシートが唯一の手書きで行なう課題となっている。【→課題9への対応】

オンラインレッスンクイズは、語彙と漢字の2セクションから構成され、1問あたり10秒（例、60問であれば計10分以内）で回答する必要がある。クイズ当日は、24時間以内であれば無制限の受験が可能である。無制限に受験可能としたのは、教師のための評価ツールというよりも、学生のための学習ツールという狙いが強い。学期末には総括的評価として、オンラインサマリークイズを行なった。「中級日本語Ⅰ／Ⅱ」は漢字150問と文法150問、「中上級日本語Ⅰ」は漢字100問と文法200問を50分以内に回答する。両クイズにある漢字セクションでは、パソコンの画面に表示される漢字語彙を確認し、回答欄にひらがなでタイピングする。時間制限があるため、学生は素早く漢字語彙を認識した上でタイピングする必要がある。これは、少ない漢字を正確に手書きできるより、より多くの漢字を認識しタイピングできるほうが、留学やインターンシップを希望する学生にとっては、有益だと考えたからである（庵2014）。実際に、『いろどり』に変更後は、表2のように、学習する漢字数も大幅に増えた。【→課題7、

3 <https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>

## 8、10への対応】

表2 新旧日本語コースで学ぶ漢字数の比較

コース名	学期	使用教材	コースで学ぶ漢字の数	
中級日本語 I	2019年秋学期	げんき I + II	L9-13	75
中級日本語 II	2020年春学期	げんき II	L14-18	79
中上級日本語 I	2019年秋学期	げんき II	L19-23	77
中級日本語 I	2020年夏学期以降	いろどり I	L1-12	143
中級日本語 II	2020年夏学期以降	いろどり I	L13-18 & いろどり II L1-6	122
中上級日本語 I	2020年夏学期以降	いろどり II	L7-18	112

口頭試験は、「中級日本語 I / II」ではそれぞれ4回、「中上級日本語 I」では3回実施した。口頭試験は、漢字と口頭タスクの2セクションから構成され、毎回、ビデオ会議システムで実施される。漢字セクションでは、1枚のスライドに10文が表示され、学生は各文の下線部の漢字語彙を発音する。計40問を2分以内、つまり、一問あたり3秒で、漢字語彙を認識し、正確に発音する必要がある。つづく口頭タスクのセクションでは、計4題が出題される。タスクが達成できたかは、内容、談話構造、流暢さ、正確さの4点から総合的に評価される。口頭タスクは、教科書やワークシートに類似したタスクが出題されるが、タスクの手順や、場面、タスクを行う相手などの条件が変わる。そのため、準備段階で、タスク内容をきちんと理解し、タスク達成に必要とされる言語知識に習熟していなければ、高得点を得るのは難しい。また、多くの場合、学生にとって既知の内容や学生の個人的な経験についての説明であるため、教科書やワークシートのモデル会話や模範解答を丸暗記しても、タスクを達成することはできない。文型シラバスの教科書を使った場合、筆記試験で重視される傾向が多い文法の正確さについては、この口頭試験ではあくまでも評価項目の一部にしかすぎない。多少の言い間違いや言い直しがあったり、必要とされる日本語の語彙が思い出せずに、1度か2度、英語で言い換えるても（例えば、冷蔵庫をrefrigeratorと言ってしまう）、得点に大きく響くことはない。【→課題10への対応】

口頭試験の第一の目的は、学生の漢字認識能力と日本語でのやりとり能力を評価することだが、隠されたもう一つの意図は、定期的にそれぞれの学生と個人面談をすることにある。口頭試験の割り当て時間は学生一人当たり20分であるが、多くの場合15分ほどで終わる。その後は毎回5~10分間を利用して、学習の取り組みについてアドバイスをしたり、学生が不安や疑問に思っていることを共有したり、または近況報告をしたりする時間とした。そのようにして、対面授業の時と同じように、学生ひとりひとりと確実に話す機会を設けて、学生とのラポール形成を心掛けた。【→課題4への対応】

プロジェクトワークは、各コース3、4回行なった（表3）。各プロジェクトでは、学生はWordを使用して原稿を作成して、LMSに提出する。そして、校閲機能を使用し、教師との

複数回のやりとりを通して、原稿を編集した。また、教師が評価するためだけの動画作成から、教室内外の視聴者を意識した意味のある動画作成を行なった。作成された動画は、LMSで共有され、学生同士で視聴し、コメントするなどした。また、例えば、「ニューイングランドのお祭り」という動画は、ロードアイランド日本人コミュニティで共有するために作成された。【→課題6への対応】

表3 プロジェクトワーク

コース	No.	プロジェクトタイトル	想定する主な視聴者	成果物	使用ツール
中級 I	1	自己紹介	クラスメイト	動画	YouTube
	2	私の好きな町	クラスメイト	動画	PowerPoint, YouTube
	3	後輩にメッセージ	後輩	動画	YouTube
	4	私のおすすめの料理	クラスメイト	動画	PowerPoint, YouTube
中級 II	1	日本でしたい5つのこと	クラスメイト	エッセー	Google Sites
	2	日本でしたい3つのこと	クラスメイト	動画	PowerPoint, YouTube
	3	フォーマルな自己紹介	将来の雇用主	動画	YouTube
	4	旅行の思い出	クラスメイト	動画	PowerPoint, YouTube
中上級 I	1	ニューイングランドのお祭り	コミュニティ	動画	PowerPoint, YouTube
	2	留学生のために	日本人留学生	動画	PowerPoint, YouTube
	3	10年後の私へ	10年後の自分	動画	PowerPoint, YouTube

学習eポートフォリオは、日本語プログラムで学ぶすべての学生が各自で作成する。ウェブページを作成するために使用したのはGoogle Sitesで、専門的な知識やコードの学習は全く必要ない。学生は日本語による自己紹介ページを作成し、日本語を使ってどのようなことをしたいのかといった目標を記述する。さらにプロジェクトワークで作成した動画やエッセーをアップロードする。また、この個人ウェブページも日本語プログラム全体でシェアされる。

#### 対策5：オンライン課外活動の充実化

現在でも試行錯誤中ではあるが、これまでに実施した主な活動は、(1) 日米のゲストスピーカーによる特別ウェビナー、(2) オンラインしゃべりば、(3) 日本の提携大学とのオンライン言語文化交流活動、(4) 「中上級日本語」の学生によるOnline Language Coachがある。引き続き、オンラインでの活動、そして、コロナ後を見据えた活動の企画と実施を行なう。【→課題5への対応】

#### 4. おわりに：ニューノーマルに向けて

新型コロナウイルスの感染拡大による未曾有の事態で、世界中の多くの教育機関では急な

オンライン化を余儀なくされた。オンライン授業のノウハウを持つ機関や教員であれば、ある程度柔軟に対応できたことと思うが、それまでオンライン授業の経験がないURIの小さい日本語プログラムにとっては非常に大きな試練となった。しかし、想定外のオンライン化だったとはいえ、結果としてこれまで気がつかなかったオンラインタスクのメリットに気がつき、普段の授業実践をも見直すよいきっかけになった。オンラインタスクのメリットとしては、一例として、オンラインクイズによって学生の自律学習を促進したり、学生がLMSやe-ポートフォリオを用いて学習管理がしやすくなった点である。オンラインによる言語交流活動の利便性も、オンライン化という状況に直面したからこそ確認できた。一方で、インターパーソナル形態のタスクやラポール形成という点では、やはりいまだ対面授業に軍配が上がる。また、教室が学生にとっては、学びに集中できる保護された学習環境である点も外すことはできない。現在の事態が収束して対面授業に戻っても、これらオンラインと対面の両方の利点を生かしたコースデザインを行なうたい。

なお、本稿における実践報告は、筆者の内省にもとづくものが主である。URIの学生の日本語運用能力が実際にどれだけ向上したかの客観的な分析は、今後の研究課題となる。具体的には、2021年春学期以降、「中上級日本語」と「上級日本語」を履修した全学生は、大学の費用負担により、ACTFLのOPIを受験する予定である。さらに、2021-22年度からは、日本語能力試験を受験する案も動いている。日々の授業実践と内省活動を通して、今後も引き続き、改善を行なっていきたい。

### 参考文献

- 庵功雄 (2014) 「これからの日本語教育において求められること」『ことばと文学』1, 86-94.
- 聖田京子 (1999) 「21世紀の外国語スタンダーズ：日本語学習スタンダーズ」翻訳版、国際交流基金日本語国際センター.
- American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL). (2012). *ACTFL Proficiency Guidelines 2012*. <https://www.actfl.org/resources/actfl-proficiency-guidelines-2012> (参照 2020-12-01)
- Fukunaga, T. (2020). Developing online Japanese courses using "Irodori" at an American university, *Proceeding of the 17th International Conference on Japanese Language Education in Malaysia*, n. pag.
- National Standards Collaborative Board (NSCB). (2015). *World-readiness standards for learning languages* (4th ed.). Alexandria, VA: American Council on the Teaching of Foreign Languages.
- Spino, L. & de Bruin, K. (2020). Increasing graduates' employability through language proficiency and dual degrees. *The Language Educator*, August/September 2020, pp. 32-36.

〈以上、福永先生からの原稿〉

### 《講演》

#### 「甲南大学の日本語教育について」

国際言語文化センター 谷守正寛

#### 〈講演者による講演要旨〉

学部生対象の日本語教育についてミニ講演を行った。まず、担当する「大学日本語入門Ⅰ・Ⅱ」のシラバスから、母語話者とともに勉学する大学生としてアカデミックな言語活動が十分に行えること、研究をはじめとする高度な文章の内容理解を深めること、学術的な文章における論理展開と文章構造の理解を訓練し、引用、注釈、参考文献等記載等をはじめとする論文作法に慣れ、アカデミックな文章における表現・語彙の拡充とともに、高度な日本語運用力を身に付けられるようになるという到達目標を説明し、母語話者レベルの文法性を持つ文章が書けるようになることをを目指す点を強調した。具体的には、南不二男氏による従属句の知見（『現代日本語文法の輪郭』1993）や、例えば、文化庁の『敬語の指針』（2007）といった最新の情報を活用し、留学生でありながらも日本の大学の学生として通用する日本語能力を身に付けることを目指している上では、特に上級レベルの場合は、日本語学的な専門的情報も積極的に活用するのがよいのではないかという提案をした。

Zoom活用による授業では、画面共有で教員のPC画面を全て見せながら、添削過程、参考資料提示やネット情報検索過程など、板書ではできにくい作業プロセスをすべて見せながら指導することの効用もありうることを述べた。また授業では学生の将来に関わるキャリア教育を中心据えて動機付けも強化しつつ、エントリーシート（自己PR文、志望動機等）、大学院の志望動機・研究計画等といった作文、SPIの日本語能力を要する問題の活用、学生自身の書いた授業レポートの実践的な授業への利用など、いくつかの指導内容例を挙げた。

〈以上、谷守先生からの原稿〉

---

#### 基調講演後の質疑応答

##### 参加者からの質問

- 使用教科書の変更には、教員側での授業アプローチの変更も必要だと思われる。オンライン授業のための研修に加え、授業方法に関しても、教員の皆さんで研修を重ねられたと考えてよいか。

〈福永先生〉 私の研究の主たる興味がTBLT (Task Based Language Teaching) であるため、TBLTの学会などを通じて研鑽を積んでいる。今回、使用教科書だけではなく、授業アプローチ自体も変えることになった。具体的には、初級コースでは、現在も教科書として『げんき』を使い、いわゆるPPP (Presentation, Practice, and Production) といったアプローチとなるが、中級・上級コースでは、Discussion-Based、Content-Based、またはTBLTに近い教授法アプローチとなっている。教員の研修については、各教員がTBLTなどについて学

んだ上で、教員間で日々、必要なディスカッションを行い、学びながら、授業方法の改善を行っている。

■ 正確さを上げるため、苦手な語彙や自信のない表現の使用を避ける傾向は、学習者にあつたか。

＜福永先生＞ タスクの取り組みの内容によっては、もっと難しい語彙や学習したばかりの文法を使ってほしいと思うこともあったが、評価の仕方として、タスクの達成・内容がもつとも大事であるため、そうした学生がいても仕方がない面がある。ただ、学生のプロジェクトワークにおいて、指導の際に強調していることは、教科書で習った語彙だけを使うのではなく、自分が言いたいことを優先し、そのためには知らない言葉なども調べて表現する、という点である。このように指導すると、難しい語彙にも果敢に挑戦する学生も多くいた。

■ 口頭試験の漢字セクションでの漢字語彙の発音テストでは、文の長さに関係なく、一律、一問3秒で実施されたのか。

＜福永先生＞ はい。文をすべて読むのではなく、文中の下線部の漢字語彙のみを発音するので、3秒でも難しくはなかったと思われる。計40問で2分間取っているが、標準回答時間は1分30秒ほどであり、きちんと復習していれば、余裕をもって終了することができる。

■ 日本の提携大学とは、どのような学生交換の状況であるのか。

＜福永先生＞ 複数の大学と提携関係にある。高知大学の学生がロードアイランド大学へ1年間の留学に来る制度があり、ロードアイランド大学から高知大学へは、夏学期中の留学、または1学期間、1年間の留学が可能である。また、インターナショナル・エンジニアリング・プログラムというものがある。これは、エンジニアリングを専攻している学生が、1学期間は日本の大学へ留学し、もう1学期間は日本企業でインターシップをするプログラムである。新潟大学、岡山大学、早稲田大学等と実施している。

■ 教科書についてですが、『いろどり』は『まるごと』よりロードアイランド大学の学生さんには合っているということだが、どのような点から判断されたのか。

＜福永先生＞ 「対策2」でご説明したように、『いろどり』の特徴を4点挙げたが、まず、「就労」という目標を考えた。また、ロードアイランド大学では、学生たちは、50分授業を週3回しか受講していない。近隣のブラウン大学では、週5回の授業で、しかも火曜・木曜は90分授業だと聞いている。本学では、ブラウン大学の2分の1の授業時間しか確保されていないため、『まるごと』を授業でカバーするのは不可能であると考えた。『いろどり』であれば、本学の授業での学習時間とも合う。無料といったこともポイントである。以上、複合的な理由から『いろどり』を採用した。

- 文法説明のための動画を配信されたとのことだが、動画作成にあたり注意された点があればご教示願いたい。

〈福永先生〉 学生の集中力を考慮し、1つ1つの動画が長くならないようにした。また、なるべく簡潔明瞭を目指した。まだ改善すべき点がある。

- e-ポートフォリオは、成績評価の対象とされたか。対象とされた場合、評価基準の概要を教えていただきたい。

〈福永先生〉 e-ポートフォリオも成績評価の対象とした。具体的には「何を載せるか」ということをリスト化し、すべての項目をカバーすれば満点とした。初級では、自己紹介（名前・学年・専攻）に始まり、よっぽどひどい間違いがなければ、よしとしたが、中級・上級では、自己紹介の内容をWord文書で提出させ、「校閲機能」を使って、教員がチェックした後、清書してアップロードさせた。学生たちは、この作業を喜んでおり、デザインも自由であるため、創意や工夫をして、自分の記録として取り組んだようである。

- 学生が作成する自己紹介動画は、デジタルカメラで撮ったものか、それとも、PPTにナレーションをつけた動画か。両方の場合、どちらが多かったか。

〈福永先生〉 両方である。動画作成にあたっては、スクリプトを読まないよう、視線に気をつけるように指導した。なお、本学の方針として、学生が作るものは、教員も必ず作ることになっているため、教員たちがまず、自己紹介の動画をサンプルとして示した。

- カナダからの参加者であるが、『いろどり』は発話の強化に重点を置いていると思われるが、使用教科書を『いろどり』に変えてから、発話能力が伸びたという印象があるか。

〈福永先生〉 主観的には、発話能力が伸びたという印象を持った。私が着任して2年目であるが、着任した時は、教科書として『げんき』が使用されていた。教科書が『いろどり』になってから、相対的に、日本語能力が伸びた。ただ具体的なデータを取っているわけではなく、あくまで主観的な印象である。

#### 福永先生と谷守先生を中心とするディスカッション

- 〈司会：中村〉 谷守先生が現在、担当している甲南大学の正規留学生の人数は何人か。

〈谷守先生〉 正規留学生は15人だが、そのうち3人は異なるキャンパスにいるため、私が担当しているのは12名の学生である。

- 〈司会：中村〉 これから10分間、教える学生の日本語のレベルは異なるが、福永先生と谷守先生にディスカッションをお願いする。

〈福永先生〉 時間が限られているため、事前に題目を谷守先生に出してあり、それに沿って答えていただきたい。私が本日、お話ししたように、アメリカ国内では「21世紀の外国語学習スタンダーズ」が様々な教育機関で参考にされている。本日の私たちの2つの講演では、言語教育での実践が中心となったが、アメリカでは、文化理解のためには「21世紀の外国語スタンダーズ」の枠組みのなかで、Practices（生活習慣・慣習）、Products（所産、産物）、Perspectives（ものの見方）という「3つのP」から文化を理解しようという提案がなされており、それに関連した実践報告も数多くある。また、ロードアイランド大学での取り込みとして、英語で日本文化を教えるクラスでは、Kubota (2003) の、文化を批判的に理解するための「4Dアプローチ」を採用している。4Dアプローチとは、Descriptive（文化を規範的ではなく記述的に理解する）、Diversity（対象となる文化のなかの多様性に注目する）、Dynamic（文化は固定的なものではなく、流動的な性質である）、そして、さきほどの「3つのP」をもとに歴史的な文脈において文化を解釈し、最後に、Discursive（文化が言説的に構築されていること）を認識する必要があると説明される〔注：「4Dアプローチ」の日本語による説明は、下記論文を参照した。瀬尾匡輝. (2019). 文化を批判的に教える—日本語教育副専攻課程における実践から—. 日本語教育方法研究会誌, 25(2), 64-65.〕。ロードアイランド大学では学生たちに、この「4Dアプローチ」を用いて、対象となる日本文化をクリティカルに理解するように促す授業を行っている。この点について、甲南大学ではどうか？つまり、学習者の日本語のレベルがかなり高い場合、日本文化や日本事情を教えるにあたっては、どのような枠組みを用いているのか？

〈谷守先生〉 本学では、アメリカの大学のように明確な枠組みを作っているわけではない。正規留学生の場合、学部の専門の授業を通して日本のことによく勉強している。そこで、こちらから何かを提供するよりも、学生からトピックを出してもらっている。枠組みとしては、「生活習慣・慣習」が近いと思うが、それらについては、よく知っているようである。私が気をつけているのは「目に見えないものの見方」である。日本人は何を考えているのかわからないためである。そこで、枠組みをこちらから提供するというよりも、学生からトピックを出してもらう。その前に強調しておきたいが、授業では、とにかく私は「ラポールの構築」を非常に重視している。そうすると、例えば、こんな相談を学生がしてきた。「コピー代70円を日本人の友達に借りたが、返そうとすると、いい、いい、と3回も言われたので、中国のお土産を渡した。先生、これで大丈夫ですか」 このように学生からトピックが出てくるので、わりとフリーな感じでやっている。枠組みで言うと「ものの見方」の一部であると言えよう。

〈谷守先生〉 日本では、授業中も含めて、臨機応変に学生の言いたいことを聞いているが、アメリカでは、授業時間の制限などがあると思う。そのあたりはどのようにやっておられるのか。

〈福永先生〉 日本語コースでは、50分授業が週3回しかないので、時間的制約がある。ただ、学生たちが、自分の言いたいことが言えるように、さまざまなプロジェクトワークなどを通して、なるべく臨機応変に学生がやりたいことをできるように工夫している。さらには、時間が足りないからこそ、課外活動である「しゃべりば」（会話クラブ）や「よもよも」（読書クラブ）を通して、日本語に接する機会を増やそうと努力している。

〈谷守先生〉 アメリカの大学では、日本語の授業以外に、英語でレクチャーされる日本についての科目は開講されているのか。

〈福永先生〉 本学の例でいえば、日本文化のコースは、英語で開講されている。言語以外では、「日本の歴史」が英語で開講されている。

〈谷守先生〉 本学に来たアメリカ人留学生で、大阪城に一緒に行つたとき、真田とか武士の名前をよく知っていた。本人はアメリカで勉強したと言っていた。日本語ができなくても、知識は結構持っているように思われた。

〈福永先生〉 本学の場合、文化のクラスでは、Show & Tellという形式で、学生に小さいトピックで毎回発表してもらっている。ファイナル・プロジェクトでは、学生が自分の好きなトピックを選んで、先ほどの4Dのアプローチから発表することになるが、7割、8割が私のよく知らない内容である。学生に人気があるトピックは、まず、ポップカルチャー、アニメ、漫画、ゲームである。

〈谷守先生〉 すると、日本語の先生は、ポップカルチャーについて勉強されるのか。

〈福永先生〉 いや、むしろ、学生に教えてもらうようにしている。「そのトピックを知らない教員に教えてほしい、教員を楽しませてほしい」とお願いしている。すると、学生たちは嬉々として、自分の好きなトピックがいかに素晴らしいかを語ってくれる。

〈谷守先生〉 やはり、学生が言いたいことを出すようにすると、ストレスがなく、やる気がますます起こると私も感じている。学生に書かせる際にも、ときどき指示はするものの、書きたいものを自由に書かせると学生は喜ぶ。

〈司会：中村〉 ディスカッションを続けていただきたいが、時間が迫ってきた。最後にひとつだけ、福永先生にお聞きしたい。口頭試験は学生一人あたり15分とあったが、授業外で実施されたのか。1人あたり15分、1クラス20人として、ワン・セメスターで3、4回実施なさったのか。

〈福永先生〉 今学期に関しては、クラスを休講しているときもあった。その間、学生たちには、プロジェクトワークを同時進行で課していた。ただ、その授業時間を使っても、全然、時間が足りなかったため、口頭試験がある週は、朝から夕方まで、教員は口頭試験に出でっぱりという感じであった。

〈司会：中村〉 わかりました。ありがとうございます。やはり、コロナ禍で、私たち外国語の教員は、仕事が非常に増えている。オンライン授業においては、対面授業でやっていることを補う工夫も必要となるからである。甲南大学では、2020年度後期、7割の授業が対面で実施できているが、オンライン授業もあるため、創意工夫がやはり必要であり、さまざまな問題も抱えている。

本日は、福永先生、谷守先生から、非常に良いお話を伺った。最後に、国際言語文化センター英語担当の吉田桂子先生にまとめをお願いする。

〈まとめ：吉田桂子先生〉

福永先生、谷守先生、非常に貴重なお話をありがとうございました。感謝申し上げます。本日の研究会では、まず、国際言語文化センター所長の藤原先生から、本センターの教育理念の説明があった。学生が、複数の言語を同時に学ぶことにより、自文化、他の異文化についてきちんと理解しつつ、言語と文化の両方について、多様な考え方があることを身につけることを目標としている。

基調講演として、アメリカの大学で教鞭を執られている福永先生から、アメリカの日本語学習者が、どのように日本語を学習しておられるのか、特に、このパンデミックの中でどのように授業を展開されているのか、今後、どのように取り組まれるのかをお話しいただいた。10個の問題点に触れていただいた。春学期に10個の問題点を分析なさり、ニーズ・アナリシスをされ、直後の夏学期、秋学期に向けて、具体的に5つの対策を立てられた。福永先生には、3つの構成でお話しいただいた。ロードアイランド大学で日本語を学習している方100名は、主として現地のロードアイランド州出身の学生さんである。パンデミックにより、急に、対面授業からオンライン授業へ変更を余儀なくされたという点は、世界中で共通だったかもしれない。ロードアイランド大学では、2021年度もオンライン授業を継続される予定だということである。オンライン授業の場合、クラス外の時間に、国外の提携大学の方々との交流を促すなど、オンラインを使うことにより、大学外の人々と繋がることができ、コミュニティができる。また、学生が、発表のための動画を作成する際、動画作成の意義、誰が見て評価するのかという点については、学生自身が、3か月前の自分を振り返ってみて分析しているという例なども興味深く聞かせていただいた。

谷守先生は——福永先生とも共通している点であるが——日本語学習者が、今後、日本での就職（福永先生の学生さんの場合は、日本への留学）を考えている点を重視なさり、よりオーセンティックに、学生が本当に使正在する日本語の運用能力の養成を目指しているこ

とがわかった。おふたりの先生の講演とディスカッションから、私たちが学ぶことが非常に多い研究会であった。おふたりに感謝申し上げる。

〈司会：中村〉 皆さん、本日は土曜日の朝から大勢の方々にご参加いただき、心より感謝申し上げる。今後、国際言語文化センターでは、できる形態で研究会を続けていきたいと考えている。今回の経験を今後の方針に活かすため、この後、簡単なアンケートをお送りするので、是非ご回答いただきたい。ご回答をいただいた方に、福永先生と谷守先生の資料を折り返しお送りする。12時30分になったので、これにて閉会させていただく。

---

#### 初めてのZoom研究会を終えて

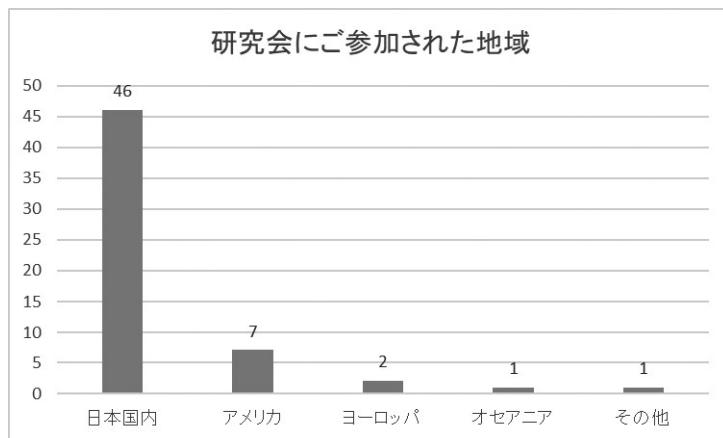
2020年3月、日本でも広まったCOVID-19に関する対策のため、本学では、前期の授業開始を2週間遅らせた。その後、2020年4月7日に兵庫県など7都道府県に「緊急事態宣言」（兵庫県については同年5月21日に解除）が出されたため、本学の授業は、実験やゼミなどの特別な授業を除いて、前期の授業は「Web対応授業」となった。夏休み明け、感染状況のステージが下がっており、後期授業については、第3週目から原則として対面授業を実施できるようになったものの、いわゆる「三密」を避けるため、通常よりも広い教室を使用してソーシャル・ディスタンスを確保し、学内でのマスク着用、手指の消毒などに注意しつつ、授業を進めた。1996年以来、本センターが、年に2回、定期的に開催している「言語カリキュラム開発研究会 全体研究会」は、前期には開催できなかつたが、後期に入ってから、3人の委員が中心となって全体研究会の形態について相談した。感染状況のステージが上がると、大勢の人が集まる可能性のある研究会の開催が危ぶまれるという状況のなか、今回初めてZoomでの全体研究会を企画した。Zoomミーティングで実施する研究会であれば、講演者・参加者ともに、世界中どこからでも参加でき、開催の是非が感染状況に左右されることがないという点に注目し、研究会の新しい形態として実施することになった（ただし、時差の問題は残った）。

今回の研究会のテーマを考えるに際しては、できるだけ多くの方に参加してもらえるように、講演での使用言語は日本語とし、また、これまでの本研究会にて、主たるテーマとして扱われることがなかった「日本語教育」を中心に据えて基調講演の講師を探すことになった。委員の一人である中村は、2019年8月、カナダのオタワに位置し、本学の提携校でもあるカルトン大学（Carleton University）で開かれたTBLT（Task-Based Language Teaching）2019の学会にて、米国のロードアイランド大学で教鞭を執っておられる福永達士先生の日本語教育に関する発表（発表言語：英語）を聞き、個人的にお話をする機会があった。コロナ禍におけるアメリカの大学の事情を知りたい、という希望もあり、「コロナ禍における外国語教育—日本語の場合—」というテーマで、福永先生に基調講演を打診したところ、ご快諾

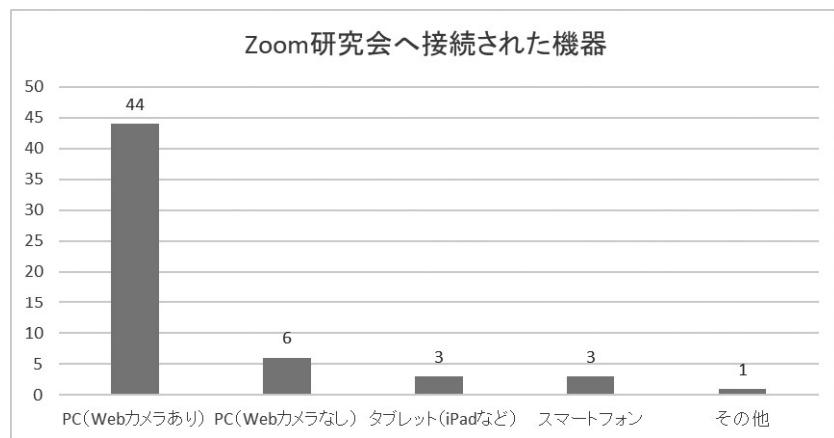
いただいた。また、本学の正規留学生の日本語教育を担当している谷守先生に短い講演を引き受けさせていただいた。

研究会への案内と参加申込をオンラインで行うのは初めてであったが、参加申込のフォームは、藤原所長がFormsで作成してくださった。参加申し込み期間は11月16日～12月16日、申込者数は96名であった。当日、急に参加できなくなった方、時差の関係で参加が難しくなった方がいたため、実際の参加者は67名であった。Zoomミーティングへの入り方の説明PDFは中村が作成した（アンケートの結果から、慣れていない方も問題なく参加していただけたようだ）。なお、研究会開催の1週間前に、14時間の時差のある米国ロードアイランド州と神戸の本学をZoomでつなぎ、問題がないかどうか、複数のスピーカーがいる場合の共同ホストの設定についても予行演習を行っておいたため、当日の混乱はなかった。初回のZoom研究会であったが、インターネット上のトラブルも起こらず、時間配分もほぼ予定通りに進めることができた。なお、研究会終了後すぐ、国際言語文化センター事務室から、参加申し込みをされた方全員に実施後の簡単なアンケートを送信してもらった。なお、アンケートの回収率を上げるため、福永先生と谷守先生に講演資料の一部を提供していただき、アンケートに回答してくださった方には、資料をメールでお送りするという工夫も施した。その甲斐があって、57名の方がアンケートに回答してくださった。以下、今後のために、実施面に関する回答の一部をグラフにて表示しておく。

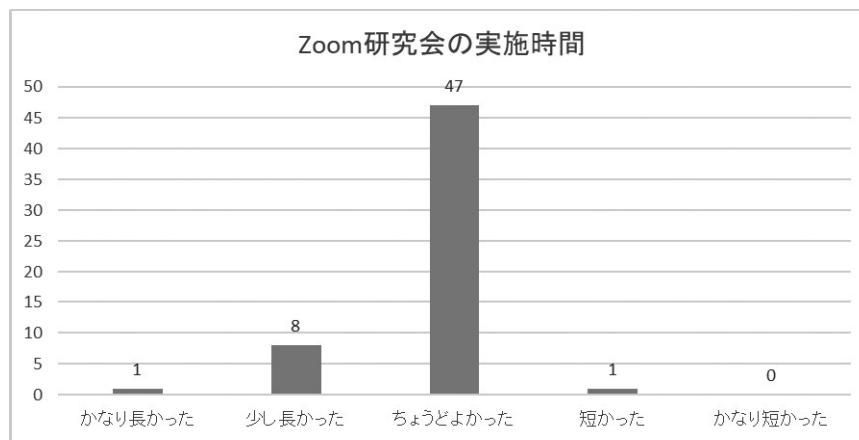
#### ・研究会にご参加された地域



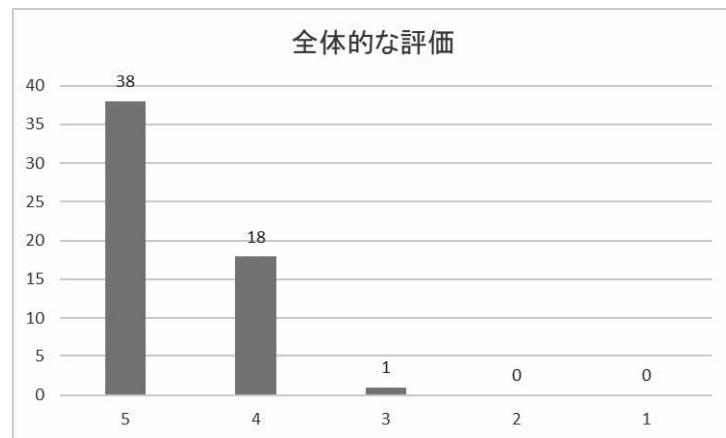
- 今回のZoom研究会へ接続された機器は何でしたか？



- 今回のZoom研究会の実施時間（約2時間）はどうでしたか？



- 今回の研究会の全体的な評価をお聞かせください。



評価点(5点が最高点)	票数	平均値
5	38	4.65
4	18	
3	1	
2	0	
1	0	

〈結び〉 21世紀に入り、グローバル化が一層進展し、観光や留学を含めた人々の移動がますます増加していた時期、2020年3月、突如としてCOVID-19の感染拡大が数多くの国で確認され、WHO（世界保健機構）のテドロス・アダノム事務局長から「パンデミック認定」宣言が3月11日に出された。爾来、世界は一変してしまった。感染拡大を避けるため、現在も通常とは異なる生活様式が求められ、大学での授業形態もさまざまな変更を余儀なくされている。世界各国がCOVID-19の感染状況に応じて国境を閉ざし、国際線の飛行機の運行も極端に減っている。それゆえ、現時点では、海外への留学を具体的に考えるのは難しい状況だ。だが、言語が異なっても人々が繋がること、言語や文化の異なる人々とコミュニケーションをとることは、Zoomをはじめとする文明の利器のおかげで、さほど大きな支障はなく継続されている。研究会や学会への参加という面だけを考えれば、空間的な移動に伴う経済的・時間的負担がほとんどないかたちで、世界各地で開催されるオンラインでの研究会・学会に参加できることは、ある意味でメリットであるかもしれない。しかし、学生たちは、4年間の学業を終えれば、実社会に出てさまざまな形で仕事に従事することになる。画一的なオンライン授業だけでは心もとないのは言うまでもない。この点を十分に踏まえ、今後の外国語教育の実践方法について検討していく必要があろう。全面的にオンライン授業を余儀なくされる緊急事態においては、福永先生が基調講演で紹介されていたように、オンラインでの課外活動を充実させることが考えられる。目標言語で会話する学生間のコミュニティを構築したり、提携大学の学生たちと各自の目標言語でコミュニケーションする場を提供したり、国内外のゲストスピーカーを招聘することなどである。日本において2020年度の前期にオンライン授業（オンデマンド型、リアルタイム遠隔型）を実践してきた私たち外国語担当の教員は、今後は、対面授業とオンライン授業のそれぞれの特徴を活かし、学生たちが使い慣れてきたLMS（Learning Management System）を十分に利用して、学習者の言語運用能力の伸長を目指すと同時に、学習者が「学ぶ喜び」を実感できるよう、授業や課題に関して一層の創意工夫を加えることが求められるだろう。本センターとしては、「言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会」が外国語の授業を担当なさる先生方にとって、教授法やカリキュラムに関する有意義なディスカッションの機会となるように今後とも努力していくたい。

(文責：中村典子)

\*各講演者の要旨は、各講演者から提出いただいたものをそのまま掲載した。